震災に思うこと

新潟県医師会理事
石　田　　央

私は現在68歳ですが68年間の間に新潟地震、新潟中越地震、新潟中越沖地震と３回も現場に居合わせました。本当に恐ろしい体験でした。今回の東日本大震災ではこれに大津波が来たのですからその恐ろしさは筆舌に尽くしがたいものであったと思われます。その上原発事故ですからこの世の生き地獄です。心からお見舞い申しあげます。このような体験にあうと文明などというものがいかにはかないものであるかを再認識せざるをえません。医療・福祉関係でもＤＭＡＴ、ＪＭＡＴ（日本医師会災害医療チーム）、ＪＣＡＴ（介護アシスタントチーム）などの活躍が連日報道されて居りました。ささやかな募金に協力するくらいしか出来なかった私には皆さんの働きに脱帽の一字です。自然災害では予期せぬ出来事の連続であるから、ありとあらゆる事態を想定して準備しなければならないと思うけれどもそれでも足りない事が出てくるでしょう。嫌でも経験から学ぶ以外にありません。

大災害は国難であるから、国家的な備えが必要であると感じました。

まず国民全体の考え方であるが、「大災害は戦争と同じであると定義する」。その上で、災害で一番必要なものは正確な情報とそれに基づく司令塔の早期の確立と一本化だと思うので、この条件を備えたものを国家的に平時に作っておくか（例えば災害担当省のようなものを作り普段でもそれ専門に取りかかる）、それが無理ならこれが一番整備されているのは自衛隊であるから災害に限って指揮権を自衛隊に一本化するなどの措置が必要である。内閣総理大臣は災害の規模や種類に応じてこれらの組織に指揮権（もちろん期間限定であるが）を委ねるか否かを決める。決めた以上全ての国民がその指揮権下に入るような国家的な作業が必要ではないかと思うのである。例えば災害が起きた場合ＤＭＡＴが全国から駆けつけるのも良いが、司令官が決めたライン上で一時待機する。その後司令官（例えば自衛隊の訓練を受けた医官）の指示に従って行動する。勿論指令部隊と情報部隊は現場に一番に直行する必要がある。このような事で直後の混乱はある程度防げるのではないかと思われる。情報は自衛隊の情報専門部隊が陸海空から多角的に収集する。よく災害が勃発すると、県知事が自衛隊の出動を要請するが、労働力を借りるだけで全体の指揮権まで委ねるわけではない。しかし大災害は戦争であると定義したのであるからある程度のメドがつくまで専門家に任せるのも一つの方法であると思うのである。今回の大災害で自衛隊の活躍を再認識したのでもっと権限を与えて緊急に備えるべきと感じました。